

■ 宇都宮で青少年向け講座

「10代も無関係でない」



パネルディスカッションで参加者の質問に答える樋野教授(左)ら
＝9日午後、宇都宮市駒生1丁目

2人に1人が生涯でがんになるといわれる中、公開講座「青少年のためのがんセミナー」が9日、宇都宮市駒生1丁目の県青年会館で開かれた。文部科学省が「国民の基礎的教養」と位置付けるがんの知

がんの仕組み平易に説明

識を、若い世代に普及するのが狙い。講師役の医師がかみ砕いた表現で、がんの仕組みやチーム医療の重要性などを説明した。

(田崎智亮)

文科省のがん研究支援プロジェクトの主催。通算7回目で本県開催は初。親子連れら約30人が参加した。主催者代表であいさつした京都大学大学院の石川冬木教授(分子生物学)は、一

つの細胞ががん化してから確認できる大きさになるのは10、20年後だとして「がん細胞の赤ちゃんは誰の体にもいる」と訴えた。約40種の発がん性物質を含むたばこを早くから吸うと、が

んになりやすくなるとして「10代にも無関係な病気ではない」とも警告した。

講師を務めたのは、県立がんセンターの医師ら。病変の組織を観察し最終診断する病理医の平林かおる医師は「細胞の顔つきで良性が悪性を判断するのが

レーで治療する流れが分かった。とてもいい勉強になった」と満足げに話した。一方で小中高生の参加は4人だけ。過去の開催地では数百人規模が集まっただけに、主催者側には「残念」

との声も。主催者事務局で順天堂大医学部の樋野興夫教授(病理・腫瘍学)は「広報面は課題の一つ。患者への差別や偏見のない社会をつくるため、取り組みを続けたい」と強調した。

役割と自己紹介し、がんが他の臓器に転移するメカニズムを「がん細胞が血管という路線を走る電車に乗り込み、気に入った臓器の駅で降りてしまおうと考えて」と平易な表現で解説した。消化器外科の白川博文院長は、実際の手術映像などを上映しながら、治療の流れや方針の決め方などを説明。患者に接する臨床医だけでなく、病理医など多職種連携が不可欠として「チームワークなくして治療は成り立たない」とした。将来は医師になりたいという栃木南中2年の石川昇瑛君(14)は「細胞ががんになる仕組みやチームプ